

二〇二六年度（令和8年度）

横浜女子学院中学校

B入学試験問題

令和8年2月1日（午後）

国語

注意

- 1 指示があるまで開けないでください。
- 2 問題は、24ページあります。
- 3 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 4 時間は50分です。

受験番号	氏名
------	----

— 次の文章の——線①～④のカタカナを漢字に、漢字をひらがなにしなさい。また、文章中の漢字の間違まちがいを1か所ぬき出し、正しい漢字に直しなさい。

現在の横浜女学院では、高校二年生時に「総合セミナー」として京都と広島を訪けいこれています。「総合セミナー」は稽古しきこ照しょうこん今の一——過去を見つめ、今を見つめ直す——旅として七十年以上前から始まりました。訪問場所は時代とともに変化してきましたが、その精神は変わらず今も受け継つがれています。神社ブツカクなどの数百年の時を経て今に伝わるものから、平和記年資料館や原爆ドームといった、まだ百年も経過していない歴史を語るものまで、過去を学ぶための場所を京都、広島それぞれ幅広く訪れます。机上きじょうでゲンミツに学びを深めるだけでなく、現地に行くことで歴史を学び、未来を展望けいこうす。そうした機会として「総合セミナー」はあります。

— 次の文章は、西村すぐり『ぼくはうそをついた』の一節です。広島に住む小学五年生のリョウタは、タヅさんが、1歳年上の憧れの先輩であるレイの曾祖母そうそばだということをとあることから知りました。タヅさんは時おり、記憶きおくが曖昧あいまいとなり亡なくなつたはずの息子のショウタをさがし歩いているため、子どもたちから変人扱あつかいされていました。ある日、ショウタをさがしていたタヅさんが行方不明となりました。それを心配したリョウタとレイは、タヅさんをさがし、河原かわらでタヅさんを見つけています。問題文は、レイが発見の知らせをするため河原を離れ、リョウタはタヅさんと二人になつた場面からです。次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。（字数制限のある問い合わせは、句読点や記号も1字に数えます。）

リョウタは、タヅさんとふたりだけになつた。河川敷かせんしきは、ふかいすりばちのそこによこたわる、ほそながい、うすやみの世界だつた。むかし、この広場でも原爆げんばくで死んだひとをやいたのだろうか。シゲルじいちゃんは、骨ほねはべつの場所に埋めなおして慰靈碑いれいひをつくつたといつていただけれど、ひろいわすれた骨がのこつているかもしれない。リョウタは、Aがすくんでうごけなくなつた。

「ショウタか」

のばした首のさきで目をまんまるにして、タヅさんがいつた。リョウタは、じぶんの名前をよばれたと思つてへんじをした。

「はい」

タヅさんはつえをほうりだしてリョウタにかけより、いきなりぎゅつとだきしめた。リョウタはびっくりして手をつ

ぱつた。はずみでタヅさんは、しりもちをついた。くらがりでもわかるくらいに、なきだしそうに顔がゆがんだ。それで

「かまわざ、タヅさんはひざをついてリヨウタの手をとつた。

「ごめんね。おそうなつて。かあちゃんがなかなかみつけられんかつたけえ」

あやまつたのはタヅさんだつた。

シヨウタは死んでしまつたと、リヨウタは、いえなかつた。

「シヨ、シヨウタです」

リヨウタはうそをついた。声がふるえた。タヅさんはリヨウタのうでや足をやさしくなで、体をみまわした。

「やけどは。けがは。いたいところはないか」

「ありません」

リヨウタが I とこたえると、タヅさんはうれしそうに、なんども、なんどもだきしめた。

「無事 ぶじ じやつたか。ようかえつたねえ。えらかつたねえ」

つめたかつたタヅさんの手が、しだいにあたたかくなつていつた。リヨウタは、タヅさんをたすけて立ちあがらせた。

「ごめんなさい。つきとばして」

「ええんよ、ええんよ」

(中略)

「さむくないです」

かたほうの手はタヅさんとつないでいたので、リヨウタは立ちあがつて、あいたほうの手で肩かけをなおしてあげた。タヅさんは、エツエツと声をつまらせて、ちいさななきごえをもらした。こまつたりヨウタは、じぶんのマフラーをはずしてタヅさんの首にまいてあげた。

「あつたかくなつた?」

リヨウタは、タヅさんのよこにすわつた。ぴつたりとくつついたうでや足から体温がつたわつてくる。

「やさしい子じや」

タヅさんは、にぎる手にちからをこめた。

「ミノルさんとは、なかよくやつとるか」
※₁

「えつ?」

リヨウタはききかえした。

「いつしょに中学へかようとつたじやろう」

そうだつた。ショウタとミノルは、同級生なのだ。

「はい、いつもいつしょにあそんでいます」

うそがひとつふえた。リヨウタは胸^{むね}がどきどきした。

「つらいことはないか?」

「ありません」

「そうか。友だちがおるならあんしんじや」

タヅさんは、つないだ手の上から、もうかたほうの手をかさねてにぎつた。リヨウタの足さきがこつんとつえにふれた。リヨウタはあいた手でつえをひろい、タヅさんに手わたそうとした。

「もういつてしまうんか」

タヅさんは、□Ⅱとしたようすで、うでにしがみついてきた。リヨウタは、タヅさんのことばの意味がよくわからなかつた。

「しんじどうなかつた」

タヅさんはいつた。

「勤^{きん}労^{ろう}奉^{ほう}仕^し先^{せん}にや遺^い体^{たい}はなかつた。全身にやけどを負^うて死んだと、ひどづてにきかされたが、かあちゃんはぜつたいしん

じんかつた。シヨウタは、どこかの救護^{きゅうご}所^{しょ}でかならず生きとると、しんじてさがしたんよ」

リヨウタは、なにかこたえてあげたかつたが、なにもいえなかつた。タヅさんは、やけどを負^うつたシヨウタにもあえず、遺体もみつけられず、遺品さえも手にすることができなかつたのだ。タヅさんはつづけた。

「あいにきてくれて、ありがとうね。シヨウタがくるしんでないならそれでええ。いつしょにいつてあげたいけど、まだい
かしてもらえん。ゆるしてください」

タヅさんは、てのひらをあわせておがんだ。そして、リヨウタの手からつえをうけとると、ゆつくりと立ちあがつた。

「タヅさん」

②

リヨウタは、あわててとめようとした。タヅさんは、ふりかえって笑つた。

「そうよばれたのは、むかしのこと。おばあちゃんでええですよ」

タヅさんは、つえにすがりながら、広場をよこぎつて歩きだした。リヨウタは、すこしうしろをついて歩いた。まえを行くタヅさんの足もとが、やつとみえるくらいの明るさしかのこつていなかつた。

しゃめんのスロープを、白い乗用車がくだつてきた。河川敷までおりると、くるりとむきをかえてとまつた。まぶしいひかりが目にとびこんでくる。

「リヨウタ」

助手席じょしゆせきからおりてきたレイがさけんだ。

ヘッドライトのなかにタヅさんとふたりならんで立ち、リヨウタは自分でも思いがけないことばを口にしていた。

「があちやん、さがしてくれてありがとう」

タヅさんは、しあわせそうなほほえみをむけた。広場のむこうから、レイが、ゆっくりと歩いてきていた。

「車のむかえがきた。があちやんはあれに乗つてかえるから、ミノルさんといっしょに行きんさい」

そして、タヅさんはヘッドライトにむかつて歩きはじめた。

運転席うんてんせきからおりてきたひとが、タヅさんをいざなうように、後部座席ごくせきのドアをひらいた。すれちがいざま、レイは、立ちどまつてタヅさんをみまもる。ひらいたドアにタヅさんがむかうのをみとどけると、リヨウタのほうへ歩いてきた。

〔レイさん、はしつてかえろう〕

③

リヨウタは、土手のながい階段をめざして広場をかけた。軽やかなレイの足音があとを追つてくる。リヨウタは、そのまま階段をかけのぼった。

なかほどでふりかえると、ちょうど、タヅさんを乗せた車がスロープをのぼるために階段のほうへむかってターンした。リヨウタは、とつさに、しゃがみこんだ。スロープから階段がみえるかもしれない。タヅさんにみられてはいけないような気がしたのだ。追いついたレイが、おなじように、となりにしゃがみこんでいた。

ふたりは階段にならんですわり、車が土手道へあがるのをまつた。車が行つて、しづかになるとレイはいった。

「どうして車に乗らなかつたの」

リヨウタは、タヅさんののぞみをかなえてあげたかったのだ。でも、それが車に乗らないことかと問わると、よくわからなかつた。ただ、レイを車に乗せてはいけないような気がしたのだった。

「タヅさんはぼくのことを、ショウタさんだと思つていて、レイさんをみていつたんです。ミノルさんといつしょに行かつて」

レイは、はじかれたようにリヨウタの顔をみた。

「ミノルさんつて、原爆で亡くなつたひと」

「ぼくのおじいちゃんのおにいさんです。ショウタさんの友だちでした」



リヨウタは、河川敷でのタヅさんを思った。「ミノルさんといつしょに行きんさい」と、いつたときのタヅさんの顔は満

足 さく そうで、とてもおだやかだった。

むこう岸の土手道をはしる車のヘッドライトが、川の瀬 せ に反射して星空のようにみえた。つめたい風がほほをなでていく。



「リョウタのおかげね。ありがとう」

レイがぽつりといった。くらくて表情 ひょうじょう はわからなかつたけれど、やさしい声だった。

「でも、ほく、うそをつきました。ショウタかつてきかれて、ショウタさんのふりをしました」

タヅさんは、リョウタのうそに気づいていただろうか。

タヅさんは、すぐにわすれてしまふかもしれないけれど、リョウタは、きょうのことをおぼえていてあげようと思った。

あのとき、かわしたタヅさんとのやりとりは、タヅさんとリョウタだけのひみつだつた。

「うそつきは、わたしも共犯 きょうはん ね。ミノルさんのふり、しちやつたもの」

「あ。そうか、共犯者か。ごめんなさい」

そうこたえながらも、リョウタは心が軽くなつていくのをかんじた。

階段のこりをあがりながら、リョウタはいってみた。

「レイさんは、どうして車に乗らなかつたんですか。共犯者にならずにすんだのに」

「それは、リョウタがきゅうに、はしりだしたから」

「狩猟本能ですか。猫みたいですね」

「ばかにして」

レイが笑う。リョウタは、住宅地のあかりにむかってかけだした。⁽⁴⁾レイの足音が追ってきた。

（西村すぐり『ぼくはうそをついた』より）

- ※1 ミノルさん：原爆で亡くなってしまった、リョウタの祖父の兄。
※2 勤労奉仕先：ショウタが働いていたところ。

問一 □A (3行目) には、体の一部を表す語句が入ります。その言葉を答えなさい。

問二 □I (19行目) と □II (46行目) に入る語句の組み合わせとして、最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|---|
| オ | エ | ウ | イ | ア | I | I | I | I | II | II | II | II | |
| □I | □I | □I | □I | □I | どんどん | ずばずば | ふらふら | くらくら | おろおろ | はらはら | もじもじ | しぶしぶ | |
| しぶしぶ | だんだん | おずおず | おづおづ | はらはら | くらくら | ふらふら | ずばずば | どんどん | ア | イ | ウ | エ | オ |

問三

タヅさんの心情を説明したものとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 拒まれたことで心がくじけそうになつたが、息子への愛情をあらためて認識し直し、その愛情を手を通して力強く伝えようとしている。

イ 暗がりの中で突き飛ばされたので前後不覚になつたが、リヨウタの手が近くにあつたので安心することができている。

ウ 突き放されたことで腰を痛めて泣き出しそうになつたが、その腰の痛みよりも、息子との再会の喜びが大きく勝つている。

エ 息子と再会できたと喜んでいる時にその息子から突き飛ばされたことに驚いたが、それでも息子を大切に思う気持ち

ちは変わらず持ち続けている。

オ 息子から拒絶されたことで心を痛めるが、ようやく息子と再会できたことを喜ぶとともに、長い間探し出せなかつ

たことを申し訳なく思つてゐる。

問四

――線②「タヅさんのことばの意味」(46行目)とあります、それはどのような意味ですか。説明しなさい。

問五

——線③「レイさん、はしつてかえろう」（73行目）とあります、この時のリョウタの様子を説明したものとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア タヅさんを家族のもとへ送り届けることができたことで安心し、その達成感をレイさんと分かち合いたいと思^{いっしょ}一緒に走ろうとしている。

イ タヅさんに氣を遣つて嘘^{つか}を重ねつづけてしまったことを悔い、その後悔を全力で走ることで少しでも紛らわせようとしている。

ウ 予定よりも早いレイの迎えを喜ぶとともに、ショウタのふりをしていたことがタヅさんに伝わらないように配慮^{りょ}している。

エ レイにリョウタと呼ばれたことで、タヅさんに嘘をついていたことがばれてしまつたかもしけないと想い心配して早くこの場を離れようとしている。

オ レイをミノルと思っているタヅさんの気持ちを汲み、最後までその想い違いを保てるよう^くに気遣い、車に乗らないようにしている。

問六 ▼マーク（88行目～93行目）の間で使われている表現技法と同じ表現技法が使われているものを次より1つ選び、記号

で答えなさい。

ア 満で二十九歳になつた六尺はゆうに越すこの男は、あわてて眼をそらした。（中上健次「地の果て至上の時」）

イ 部屋の中が見えた。がらんとした荷物のない部屋。畳。（柴崎友香「寝ても覚めても」）

ウ 子供が、母としては一ばん好きな表情で、生涯忘れ得ない美しい顔をして（岡本かの子「鮓」）

エ 日はうららかに川面を射て、八畳の座敷は燃えるように照つた。（谷崎潤一郎「刺青」）

オ 日本人は歴史の前ではただ運命に従順な子供であつたにすぎない（坂口安吾「墮落論」）

問七 ——線④「リョウタは、住宅地のあかりにむかってかけだした」（108行目）とあります、この時のリョウタの心情

を説明したものとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア タヅさんのことを思い感傷にひとりながらも、レイにも嘘の共犯者になつてもらえたので罪悪感が少しずつ薄れ始めている。

イ タヅさんとのひみつを大切にしていこうと思いながらも負い目も感じていたが、レイとのやり取りが楽しくなつたので気がまぎれている。

ウ タヅさんとショウタのふりをしながら接したことは大切なことだと思う反面後ろめたさも感じていたが、レイと話す中でその後ろめたさが緩和している。

エ タヅさんに嘘がばれてしまつてはいるかも知れないと不安になるが、レイも共犯者になつてくれたのでその嘘はばれていないはずだと思い直している。

オ 今日のやり取りをタヅさんが忘れてしまつても、覚えていようと気負っていたが、やさしいレイからの語りかけによりその気持ちが軽くなつていてる。

問八 中学1年生のAさんのクラスでは、この本文を読んだ際、リヨウタの嘘をつくという振る舞いは正しかったのか話題になりました。その話題についてAさんは【資料】を参考にしながら考察をすることにし、【文章】を書きました。【文章】

の1に入るものは【資料】からぬき出し、2に入るものは自分で考えて答えなさい。

【資料】

※ ボクは「一般に無害と認められているうそでも、まったく正しい手段でその目的が達せられるなら、それは必要ではないのである」と述べています。相手を喜ばせるとか失礼のないようにするという目的には、嘘をついて相手を騙す以外のもつと良い手段があるかもしれないし、そうだとすれば、ボクの言うように、嘘をつく必要性はなくなるはずです。

（池田喬『嘘をつく』とはどういうことが—哲学から考える）

※ ボク…シセラ・ボク。スウェーデン生まれの哲学者

【文章】

本文の中で、リヨウタはタヅさんのためにうそを付いた。それは、亡くなってしまった息子であるショウタを探し続けるタヅさんのことについての行為である。つまり、【資料】で述べられるところの、1があることになる。それでは、ここで重要なのは嘘をつく以外に良い手段があつたかどうかだ。私は、ショウタが亡くなってしまったという状況を考えたとき、嘘をつく以外にタヅさんを助けることはできなかつたと考へる。だからこそ、リヨウタの振る舞いは2といえる。

三 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。（字数制限のある問い合わせは、句読点や記号も1字に数えます。）

広島市現代美術館をかわきりに東京、群馬、沖縄、長野、宮崎と日本各地をまわり、海外では上海、カナダ、イギリス、
ドイツ、フランスと「ひろしま」を展示してきました。^{※1} I アメリカでの展示や出版がなかなかうまくいかない。話はあつても具体的になる前に流れてしまうか条件が合わず私からおりるなど、何かスムーズに事が運ばず、停滞していた。過去においてヒロシマに関する展示はアメリカの歴史と風土からくる一方的な価値観と解釈が一般的であるから、アメリカでの「ひろしま」の展示や出版はうまくいかないのは当然といえる。それにしてもII、「ひろしま」をアメリカで発表したいと思う気持ちも自然であり当然である。

写真は一枚の紙の上にプリントされたものだから破けば簡単に紙くずになってしまふような、どこか危うい軽さと、その逆に印画紙の上に過去や現在や未来までもを見通すことの出来る強度のある像をプリントしているともいえる。

そんな写真のヒロシマは見る側にとっては過激で危険が伴う。^{ともな} 見たくない過去がそこにあるのだから。ヒロシマという響^{ひび} ときは人を不安にさせる。ふれたくない、見たくない、忘れない。^{かじょう} 過剰で残酷で野蛮な人類史上最悪な負の遺産であるから、^{やばん} 10 わざわざヒロシマを展示して、足を運んで見に行くなんて出来るはずがない。私もそんな感じで二〇〇七年まで生きてきた。

① 外国では日本の国すべて、日本人の全体が受けた被害としての原爆であると考えている。しかし実際の日本では広島市と長崎市という地方の中に集約させて、他人事でしかない現実は今でも変わらない。

高校時代、図書館で土門拳の『ヒロシマ』の写真集をみた。その時の衝撃^{ショック}は大きく、最後まで見ることが出来ずに本をとじてしまった。何かイヤなものをみてしまったような、気持ちがざわついて気分が悪くなつたのである。それ以来広島が遠く離れてしまい、自分から広島について話すことはほとんどなかつた。その『ヒロシマ』の写真集が日本において撮影者の名前が前面に印されたヒロシマ写真のはじまりである。

写真は眼の前にある、眼に映るすべての中から撮影者が意図的に選んだ、特定された現実の複写である。写真家の思いがすべて写真に反映されるものだから、彼の思想が写しだされている。その写真にどのような言葉をそえて、どんな装丁^{そなづし}をほどこすかによって、見る側を選別する。そして写真家が生きた時代の空気が確実に写し込まれ、時代の証言者としての役割をはたしている。写真は記録するためにはり、社会に伝える使命を負わされているのだ。カメラの前の現実を眼で見た証^{しよう}拠として機能する。

だからこそ一度見たら忘れられない写真があり、二度と見たくない写真もある。見た人に何らかの影響を与える。それはまさにヒロシマの写真だから。

広島での一九四五年八月六日午前八時十五分以後の惨状^{さんじょう}は、確かに写真を見れば記録されているが、見たような気になつてもすぐに忘れてしまう。それは広島に対する現実感がまつたくないからだ。想像力をかき立てるイメージがそれらの写真から立ち上がつてこなかつた。自分の身に降りかかつたことではないので痛みが感じられない。ただ自分の身の上の出来事など、ほんのささいな事ががらでしかないので、身の内ではない他者を知る、外側を感知することによつて、自分の小さな器をこわして世界と関係をもつキッカケとして、広島での撮影は私に新しい想像力を与えてくれたのである。私が広島に何かで³⁰

きることがあるとすれば、想像することぐらいだ。

広島で被爆された方から初めて一九四五八年八月六日当日の話をうかがう機会があつた。その日の朝の出来事をきのうの事のように、私の知らない現場の在り様を静かな口調で一時間ほど話された。そしてフーッと息を飲み込み、なぜあの時みんなと一緒に死ななかつたのか……とつぶやいたのである。一方的に彼女の話を聞いていた私は初めて口を開き、あなたが生きていたから、その時の話を聞くことが出来たのですよ。こんな普通の言葉しか返せなかつたが、その時、被爆したことは³⁵被爆した人しかわからない切実な思いが心に染みて、この瞬間に広島との関係が現実として私の身体の一部に何の抵抗もなぐストンと入つた気がした。

私の父方は千葉県成田市の新勝寺参道で料亭を営む家系で東京育ちである。母方は群馬県新田郡（現みどり市）の農家の出だ。両親とも生粋の関東人である。西の方面にはまったく親戚縁者³⁶はなく、高校の修学旅行で京都、奈良、別府、長崎と駆け足で回つただけでほとんど何も覚えておらず、関西以西に興味をもつこともなく過ぎていた。

もともと旅が苦手で観光旅行はほとんどしない。日本の土地は写真の仕事があつた場所のみなので行つたことのない土地の方が多い。それが広島については、今までの様子と少しづつ変わつていく。^②それまで無縁の土地だつた広島が近くに感じられる。天気予報は広島が気になり必ずチエックする。毎年一度から二度、原爆資料館に撮影に出かける。戦後七十年がたつ今でも新しく遺品が寄贈されているからだ。

その遺品たちは私がくるのを待つていてくれたように姿を現し、戦後という時間の塊^{かたまり}になつて、硬くたたまれているセーラー服をトレーシングペーパーの上にひろげる。時間にしばられているセーラー服に空気を入れ、形を整えて透明人間に

*3

かたまり

かた

45

なつた彼女を想像しながら、このセーラー服が仕立てられて彼女が初めて袖を通したその日を想いながら、シャツジャーを押す。たつた一人の見知らぬ少女に会いに広島へ今年も出かける。

彼女の肉体は原爆に焼かれ、跡形^{あとかた}もなくなつてしまつたのか、はつきりわからない。いまだに行方不明の少女は自分の着ていたセーラー服やスカートやワンピースを決して忘れていない。私がもう一度、美しい仕立ておろしの時のように写しと50り、彼女の喜ぶ姿を想いうかべる。

こんな風に私の「ひろしま」は写真に撮り、プリントして、額に入れ、なるべくシンプルに余分な文字はなく、ただ額^{がく}装^{そう}した写真があるだけだ。サイズは108センチ×74センチと普通^{ふつう}の写真よりもはるかに大きい。この上のサイズは158センチ×100センチである。すべてフィルムでの撮影でデジタルカメラではないので、その場で写つてあるものをみると55とが出来ない。ちゃんと写つているのかどうか不安ではあるが、かえつてフィルム特有の緊張感^{きんちょうかん}と距離^{きより}があつて私に向い^{むか}ている。フィルムは現像され、すべて同時プリントで上がり、ハガキサイズのプリントをチエックする。すると思わぬ写真がたくさん出来上がつていて、こんな風に撮影現場があの時あつたのかと、プリントをみて発見する事が多い。

広島で撮影する写真はすべて七十年前の歴史の資料として原爆資料館に収められている品々だ。無機的に資料と呼ばれる、個人の持ち物であつた洋服や靴^{くつ}や靴下、時計、眼鏡、指輪、くし、そして入れ歯。誰とも知れない広島にあの日在つた人々が身に付けていた品物たちと、家にしまわれていた品々を、今や私の身体の一部をつかさどるもののような感覚で撮り⁶⁰続けている。

ヒロシマとカタカナ文字で発表された写真の基本はモノクロームである。モノクロームの黒と白はメッセージの意志が写

真に漂う。写されたその時代を見事に反映していく、それがいわゆる写真の王道である。そのように写されたヒロシマの写真の歴史は確実に大きな役割をはたし評価されるものである。その文脈の中から、良くも悪くも私の「ひろしま」が生まれたと言える。^{※4}初めてみた土門拳の「ヒロシマ」の呪縛^{じゆばく}が少しずつ溶けてゆき、私は自由に「ひろしま」を撮影して発表する。⁶⁵念願だったアメリカでの展示と出版が急転直下決まり、ニューヨークで「Here and Now: Atomic Bomb Artifacts ひろしま/Hiroshima 1945/2007」が生まれた。あんなにやりたいと思っていたときにはやきやに、忘れかけていた時に声をかけられたのだ。久しぶりにニューヨークへ、個展のオープニングと写真集のサイン会に出かけた。アメリカ、ニューヨークでの「ひろしま」は私が力を入れていた思いよりも自然に自由に受け入れられたと感じる。そして何よりもひらがなの「ひろしま」の文字が英語の中に印字されている。男たちのカタカナのヒロシマから解放されて「ひろしま」の女文字は^⑤70その美しい姿を全世界に向けて表明したのだった。

（石内都『写真関係』より）

- ※1 「ひろしま」：写真家である筆者が、被爆者の遺品を撮影したシリーズの写真。
- ※2 土門拳：山形県酒田市出身の写真家。代表作に『ヒロシマ』『筑豊のこどもたち』などがある。
- ※3 トレーシングペーパー：複写するためにはじめに使用される透明な用紙の写真。
- ※4 呪縛：人の自由をしばること。

問一 I (2行目) と II (5行目) に入る言葉として、最適なものを次よりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア むしろ イ しかし ウ したがって エ また オ やはり カ つまり

問二 I 線「出版」(2行目) と同じ構成の漢字を次より1つ選び、記号で答えなさい。

ア 個性 イ 不可 ウ 国立 エ 上下 オ 求人

問三 —— 線①「他人事でしかない現実」(14行目) とあります。なぜ「他人事」として捉えられるのでしょうか。その

ことを説明したものとして、最適なものを次より2つ選び、記号で答えなさい。

ア 原爆の体験は、広島や長崎といった地方だけに担わせようとしてしまったから。にな

イ 原爆の体験は、残酷なうえ日常とかけ離れたものであり想像することしかできないものだから。

ウ 原爆の体験は、直接体験することができないうえ身近にその体験をした人が存在しないから。

エ 原爆の体験は、被爆された方の語りがなければ決して理解することができないものだから。

オ 原爆の体験は、誰もがふれたくない負の遺産として人々が取り扱つてしまっている現状があるから。あつか

問四

——線②「それまで無縁の土地だった広島が近くに感じられる」（42行目）とあります、それはなぜですか。その理由を説明したものとして、最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 関西に縁えんもゆかりもなかつたが、広島へと足を運ぶ中で広島への想像力が具体的に持てるようになつたから。

イ 私の知らない原爆投下後の現場のありようを初めて知り、写真を通してしか知ることができなかつた現実を知れたから。

ウ 広島で被爆された方の体験談と切実な言葉を聞き、その言葉によつて広島に対する現実感を持つれるようになつたから。

エ 旅が苦手で観光旅行をほとんどしなかつたが、何度も広島に通う中で天気予報を確認するほど身近な場所になつたから。

オ 知つたような気になつていた広島だったが、被爆された方の話を聞くことで広島の詳細しょうさいを初めて知ることができたから。

問五 ——線③「こんな風」(52行目)とあります。そのことを説明したものとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 長い時間によつて古びてしまいそうになつた遺品たちを、それを所持していた人たちがどのように使つていたのかを再現するようにしているということ。

イ 遺品をかつて使用していたであろう人を想像することで、遺品に積み重なつた時間を解きほぐしその遺品を生きられたものとすること。

ウ 遺品をぞんざいに扱わずひとつひとつ丁寧に扱い、その遺品を大切にしていた人たちの気持ちに思いをはせるようすること。

エ 遺品をしばりつけてしまつた戦後という時間を忘れ、使用者の姿を想像することでその遺品本来の時間を取り戻すようすること。

オ 誰かの日常にとつて大切なものであつたということを意識し、遺品を遺品としてではなく生活必需品ひつじゅひんとして扱うようになること。

問六 ——線④「初めてみた土門拳の『ヒロシマ』の呪縛」(65行目)とはどういうものですか。50字以内で説明しなさい。

問七

——線⑤「『ひろしま』の女文字はその美しい姿を全世界に向けて表明した」（70行目）とは、どういうことですか。そのことを説明したものとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 写真集のタイトルを平仮名で表記することによって、モノクロで男性的なイメージの文脈を持つ「ヒロシマ」から解放されたということ。

イ 写真集のタイトルを平仮名で表記することによって、これまで男性的な表現に縛られてきたヒロシマのイメージから脱却だつきやくできたということ。

ウ 写真集のタイトルを平仮名で表記することによって、女性が主体となつて表現したものが世界に初めて受けられるしばことができたということ。

エ 写真集のタイトルを平仮名で表記することによって、硬質こうしつでどこか近寄りがたかった広島のイメージを女性的なイメージに更新こうしんできたということ。

オ 写真集のタイトルを平仮名で表記することによって、世界から見落とされてしまつた広島像を思惑通り提示するおもわくことができたということ。

問八 本文の中で「写真」とはどのようなものであると言われていますか。本文全体の内容を踏まえて60字以内で説明しなさい。

問九

じょきょ

戦後八十年が過ぎ、戦争体験を語れる人は徐々に少なくなっています。一方で、「資料」や「遺品」といった「物」は今後も残り続けます。そうした状況の中で、戦争を忘れないために「物」が果たす役割はこの先重要になっていくでしょうか。重要と思う場合は、その理由も含めてあなたの考えを100字以内で書きなさい。重要なことが重要だと考えるか、あなたの考えを100字以内で書きなさい。

